

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17313

研究課題名(和文) 認知症高齢者の家族介護者の役割間葛藤に関する研究

研究課題名(英文) Inter-role conflict among family caregivers of people with dementia

研究代表者

森本 浩志 (MORIMOTO, Hiroshi)

明治学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：20644652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、認知症高齢者を働きながら在宅で介護する家族(就労家族介護者)が経験する介護と仕事の両立における悩み(役割間葛藤)と対処方略、家族介護者のメンタルヘルスとの関連を検討することを目的とした。就労家族介護者を対象として質問紙調査を行った結果、役割間葛藤および同葛藤へのコーピングを測定する尺度が整備された。また、役割間葛藤の中でも、特にストレス反応に基づく介護・仕事葛藤と介護・仕事-私生活葛藤が家族介護者のメンタルヘルスとの関連が強いこと、情動焦点型コーピングと、注意制御機能の高い家族介護者では公的な介護支援サービスの利用がメンタルヘルスの維持に有効であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study examined the relationship among inter-role conflict, coping strategies, and mental health of employed family caregivers of people with dementia. For this purpose, two scales that assess inter-role conflict and coping strategies for inter-role conflict were developed. The results suggest that, in particular, strain-based caregiving interfering with work and work and caregiving interfering with personal life exacerbate mental health of employed family caregivers. The results also suggest that emotion-focused coping and, in those with high attentional control, formal support seeking were effective in maintaining the mental health of employed family caregivers.

研究分野：臨床心理学

キーワード：役割間葛藤 認知症 家族介護者 ストレス コーピング メンタルヘルス 介護負担感

1. 研究開始当初の背景

近年、わが国では認知症を有する高齢者（認知症高齢者）の介護を担う世代が低年齢化しており、働きながら在宅で介護を行う家族（就労家族介護者）が増えている。就労家族介護者の中には、介護と仕事の両立生活を送ることに困難（役割間葛藤）を覚える者も少なくなく、介護疲れを背景とした離職も珍しくない。家族介護者の介護疲れや被介護者である認知症高齢者の施設入所の背景には、家族介護者のメンタルヘルスの悪化があると論じられてきたことを踏まえ、就労家族介護者のメンタルヘルスの維持・向上は、今後のわが国の家族介護者への支援において不可欠な課題であると考えられる。しかしながら、これまでのわが国の認知症高齢者の家族介護者への支援に関する研究では、就労家族介護者が経験する役割間葛藤については十分に扱われてこなかった。

ところで、これまで認知症高齢者の家族介護者への心理学的支援においては、認知症の症状への対応スキルやストレスマネジメントスキルの向上などに焦点を当てた、認知行動療法に基づいたプログラムが一定の有効性を有するとされてきた（Schoenmakers et al., 2010）。しかしながら、これらのプログラムでは就労家族介護者の役割間葛藤の問題は十分に扱われていないという問題があった。直面している問題の種類に応じて有効な対処方法は異なること（Lazarus et al., 1984）を踏まえ、就労家族介護者への心理学的支援においては、役割間葛藤の緩和に有効な要因について検討することが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、就労家族介護者の役割間葛藤を緩和する要因、および役割間葛藤がメンタルヘルスへ与える悪影響を緩和する要因について検討することを目的とした。家族介護者のメンタルヘルスの検討においては、心理学的ストレスモデル（Haley et al., 1996; Lazarus et al., 1984）を用いることが有用であることが指摘されている。本モデルでは、ストレッサーに対する認知的評価やコーピング、ソーシャルサポートが、家族介護者のメンタルヘルスに影響を与える主要な要因として扱われている。そこで本研究では、心理学的ストレスモデルに基づいて、役割間葛藤のメンタルヘルスへの悪影響を緩和する要因として、上記の3つの要因を扱うことにした。

また、近年の認知行動療法に関する研究では、注意制御機能（Wells, 2002）の重要性が指摘されている。仕事や介護などの複数の役割の遂行においては、柔軟な注意の切り替えが求められると推測されることから、本研究では上記の3つの要因に加えて、注意制御機能についても扱うことにした。

3. 研究の方法

(1) 役割間葛藤および役割間葛藤へのコーピングの測定尺度の作成

役割間葛藤の就労家族介護者のメンタルヘルスへの悪影響の検討においては、まずわが国の就労家族介護者が経験する役割間葛藤を定量的に測定できる尺度が必要となる。これまでの研究では、就労家族介護者が経験する役割間葛藤には仕事における要求が介護役割の達成を阻害する「仕事 介護葛藤」と、介護における要求が仕事役割の達成を阻害する「介護 仕事葛藤」の2つの方向があることが想定されてきた。しかしながら、わが国ではこれらの2つの方向を区別して測定できる尺度は開発されていなかった。また、本研究で検討する要因の1つである、役割間葛藤へのコーピングを測定する尺度については、国内外を含めて開発されていなかった。そこで、わが国の実情に即した就労家族介護者の役割間葛藤および役割間葛藤へのコーピングの測定尺度を作成することにした。

就労家族介護者456名を対象として、3か月の期間を置いた2回の質問紙調査を実施した。役割間葛藤の尺度項目は、森本他（2015）で得られた100項目をKJ法の手続きを用いて分類した結果得られた34項目を用いた。役割間葛藤へのコーピングの尺度項目については、森本他（2015）で得られた109項目に先行研究から収集した11項目を加えた計120項目を、KJ法の手続きを用いて分類した結果得られた42項目を用いた。

(2) 役割間葛藤と認知的評価の関連

心理学的ストレスモデルでは、直面している問題（ストレッサー）をどのように評価するかが、メンタルヘルスに直接的に影響を与えることが想定されている（Lazarus et al., 1984）。そして、これまでの家族介護者を対象とした研究では、介護に対する自己効力感を高めることが、良好な認知的評価につながるということが指摘されてきた（Cheng et al., 2013）。そこで、介護に対する自己効力感が役割間葛藤を緩和するかどうかについて検討した。就労家族介護者456名を対象として、3か月の期間を置いた2回の質問紙調査を実施した。

(3) 役割間葛藤とコーピングおよび注意制御機能の関連

これまでの家族介護者を対象とした研究では、自身の気持ちの緩和に焦点を当てた情動焦点型コーピングが、家族介護者のメンタルヘルスの維持に有効であることが指摘されてきた（Li et al., 2012）。一方で、これまでの研究では介護負担に対するコーピングの有効性が検討されており、役割間葛藤に対してどのようなコーピングが有効であるのかについては明らかにされていなかった。また、コーピングの選択過程には注意制御機能が密接に関わっていることが指摘されてき

た(木村他, 2011)。このため、役割間葛藤に対するコーピングの有効性は注意制御機能の高低によって異なることが想定された。そこで、役割間葛藤に対するコーピングの有効性について、注意制御機能を考慮して検討した。就労家族介護者 456 名を対象として、3 か月の期間を置いた 2 回の質問紙調査を実施した。

(4) 役割間葛藤とソーシャルサポートの関連

これまで家族介護者のソーシャルサポートについては、主に家族や友人などの私的なソーシャルサポートと訪問介護やデイサービスなどの公的なソーシャルサポートの 2 種類のサポート源の有効性について検討が行われてきた。そして、私的なソーシャルサポート(特に情緒的サポート)は家族介護者のメンタルヘルスの維持に有効である一方で、公的なソーシャルサポートの有効性は一貫しないことが指摘されてきた(Chien et al., 2011; Vandepitte et al., 2016)。そこで、私的なソーシャルサポートが役割間葛藤の緩和および役割間葛藤の就労家族介護者のメンタルヘルスへの悪影響を緩和するかについて検討した。就労家族介護者 456 名を対象として、3 か月の期間を置いた 2 回の質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 役割間葛藤および役割間葛藤へのコーピングの測定尺度の作成

データ分析の結果、役割間葛藤については、時間に基づく介護 仕事葛藤、ストレス反応に基づく介護 仕事葛藤、行動に基づく介護 仕事葛藤、仕事 介護葛藤、介護 仕事 私生活葛藤の 5 下位尺度 20 項目から構成される「介護 仕事葛藤尺度」が作成され、十分な信頼性と妥当性を有することが確認された。

役割間葛藤へのコーピングについては、予定の調整、介護役割の軽減、情動焦点型コーピング、私的支援追及、公的支援追及の 5 下位尺度 25 項目から構成される「役割間葛藤へのコーピング尺度」が作成され、一定の信頼性を有することが確認された。

(2) 役割間葛藤と認知的評価の関連

データ分析の結果、本研究で扱った 2 つの介護に対する自己効力感(認知症の症状マネジメントに対する自己効力感、セルフケアに対する自己効力感)について、認知症の症状マネジメント自己効力感が高いほど、時間に基づく介護 仕事葛藤が多いこと示された。また、セルフケアに対する自己効力感が高いほど、時間に基づく介護 仕事葛藤、ストレス反応に基づく介護 仕事葛藤、介護 仕事 私生活葛藤の 3 つの役割間葛藤が少ないことが示された。しかしながら、これらの関連は 1 時点における横断的データにおいてのみ見られ、3 か月の期間を置いた縦断的デ

ータにおいては見られなかった。

介護に対する自己効力感が、介護負担の増加に伴う将来の役割間葛藤の増加を防ぐことができるかどうか(緩衝効果)について検討したところ、認知症の症状マネジメントに対する自己効力感およびセルフケアに対する自己効力感ともに、緩衝効果は見られないことが示された。むしろ、認知症の症状マネジメントに対する自己効力感が高い場合は、1 回目の調査における介護負担の高さが、3 か月後の 2 回目の調査における役割間葛藤(特に行動に基づく介護 仕事葛藤と介護 仕事 私生活葛藤)の高さにつながっていた。これらの結果から、認知症の症状マネジメントに対する自己効力感が高い就労家族介護者は介護に積極的に取り組むことで、仕事や自身の私生活が犠牲になっていることが考えられた。

(3) 役割間葛藤とコーピングおよび注意制御機能の関連

データ分析の結果、予定の調整と介護役割の軽減を多く使用しているほど、横断的および縦断的データともに、メンタルヘルスが不良であった。一方で、情動焦点型コーピングを多く使用しているほど、横断的および縦断的データともに、メンタルヘルスが良好であった。しかしながら、これらのコーピングが、役割間葛藤がメンタルヘルスに与える悪影響を緩和するかどうか(緩衝効果)を検討したところ、予定の調整、介護役割の軽減、情動焦点型コーピングのいずれのコーピングにおいても緩衝効果は見られなかった。

私的支援追及と公的支援追及は全体的にメンタルヘルスと直接的な関連は見られなかったが、注意制御機能の高い就労家族介護者が、ストレス反応および行動に基づく介護 仕事葛藤に対して公的支援追及を多く行っている場合は、3 か月後のメンタルヘルスの悪化は見られなかった。一方で、注意制御機能が低い就労家族介護者が、これらの役割間葛藤に対して公的支援追及を多く行っている場合は、3 か月後のメンタルヘルスの悪化が見られた。

その他、注意制御機能が高いほど、横断的および縦断的データともに、メンタルヘルスが良好であった。

(4) 役割間葛藤とソーシャルサポートの関連

データ分析の結果、情緒的および道具的な私的なソーシャルサポートが多いほど、横断的データにおいては、一部の役割間葛藤が少なかった。一方で、これらの私的なソーシャルサポートは、介護負担の多さが役割間葛藤の増加を通して、就労家族介護の将来のメンタルヘルスに与える悪影響を緩和する効果(緩衝効果)は有さないことが示された。

本研究の結果を総合すると、情動焦点型コーピングの使用は就労家族介護のメンタルヘルスの維持に有効であることが示唆され

たものの、これまでの認知症高齢者の家族介護者を対象とした検討において、家族介護者のメンタルヘルスの維持に有効であるとされてきた要因（介護に対する自己効力感、コーピング、私的なソーシャルサポート）だけでは、就労家族介護が経験する役割間葛藤の緩和およびメンタルヘルスの維持には十分ではないことが示唆された。一方で、本研究で取り上げた注意制御機能を高めることが、就労家族介護のメンタルヘルスの維持に有効であることが示唆された。また、注意制御機能を高めることで、一部の役割間葛藤に対しては、公的な介護支援サービスの利用（公的支援追及）が就労家族介護のメンタルヘルスの維持に有効に働くことが示唆された。

<引用文献>

- Cheng, S. T., Lam, L. C., Kwok, T., Ng, N. S., & Fung, A. W. (2013). Self-efficacy is associated with less burden and more gains from behavioral problems of Alzheimer's disease in Hong Kong Chinese caregivers. *Gerontologist, 53*, 71-80.
- Chien, L. Y., Chu, H., Guo, J. L., Liao, Y. M., Chang, L. I., Chen, C. H., & Chou, K. R. (2011). Caregiver support groups in patients with dementia: A meta-analysis. *International Journal of Geriatric Psychiatry, 26*, 1089-1098.
- Haley, W. E., Roth, D. L., Coletton, M. I., Ford, G. R., West, C. A. C., Collins, R. P., & Isobe, T. L. (1996). Appraisal, coping, and social support as mediators of well-being in Black and White family caregivers of patients with Alzheimer's disease. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 64*, 121-129.
- 木村 諭史・首藤 祐介・坂井 誠 (2011). 注意機能と認知的評価およびコーピングとの関連. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 10, 9-14.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- Li, R., Cooper, C., Bradley, J., Shulman, A., & Livingston, G. (2012). Coping strategies and psychological morbidity in family carers of people with dementia: A systematic review and meta-analysis. *Journal of Affective Disorders, 139*, 1-11.
- 森本 浩志・古田 伸夫・河野 光慧・壁谷 眞由美 (2015). 認知症患者の家族介護者の役割間葛藤の記述的検討. 広島国際大学心理科学部紀要, 2, 15-28.
- Schoenmakers, B., Buntinx, F., & DeLepeleire, J. (2010). Supporting the dementia family caregiver: The effect

of home care intervention on general well-being. *Aging & Mental Health, 14*, 44-56.

Vandepitte, S., Van Den Noortgate, N., Putman, K., Verhaeghe, S., Verdonck, C., & Annemans, L. (2016).

Effectiveness of respite care in supporting informal caregivers of persons with dementia: A systematic review. *International Journal of Geriatric Psychiatry, 31*, 1277-1288.

Wells, A. (2002). GAD, meta-cognition, and mindfulness: An information processing analysis. *Clinical Psychology: Science and Practice, 9*, 95-100.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

Morimoto, H., Furuta, N., Kono, M., & Kabeya, M., Stress-buffering effect of coping strategies on interrole conflict among family caregivers of people with dementia, *Clinical Gerontologist*, 査読有、印刷中 DOI: 10.1080/07317115.2017.1368764

Morimoto, H., Furuta, N., Kono, M., & Kabeya, M., Can self-efficacy ameliorate interrole conflict among employed family caregivers? A moderated mediation approach, *Aging & Mental Health*, 査読有、印刷中 DOI: 10.1080/13607863.2017.1334192

森本 浩志、古田 伸夫、河野 光慧、壁谷 眞由美、認知症高齢者の家族介護者の役割間葛藤の測定、心理学研究、査読有、Vol.88、No.2、2017、pp.151-161 DOI: 10.4992/jjpsy.88.16205

森本 浩志、古田 伸夫、河野 光慧、壁谷 眞由美、認知症高齢者の家族介護者の役割間葛藤—介護者および被介護者の属性との関連—、広島国際大学心理学部紀要、査読無、Vol.1、No.1、2017、pp.43-52

<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroku-oku-u/detail/1231620170325104512>

〔学会発表〕(計7件)

森本 浩志、古田 伸夫、河野 光慧、壁谷 眞由美、認知症高齢者の家族介護者の役割間葛藤に対するコーピングと注意制御機能のストレス緩衝効果、日本認知・行動療法学会第43回大会、2017

森本 浩志、古田 伸夫、河野 光慧、壁谷 眞由美、認知症高齢者の家族介護者の役割間葛藤の緩和要因—介護に対する自己効力感の緩衝効果—、第17回日本認知療法・認知行動療法学会、2017

森本 浩志、認知症高齢者の家族介護者支援における基礎と臨床の協働(シンポ

ジウム：基礎心理学と臨床心理学の協働
- 基礎と臨床の相互作用促進がもたら
すもの -) 中国四国心理学会第 72 回大
会、2016

森本 浩志、認知症高齢者の家族介護者
の役割間葛藤 (シンポジウム：「介護者」
から考える「認知症」問題 (1)—認知・
行動療法的アプローチの可能性—) 日本
認知・行動療法学会第 42 回大会、2016

森本 浩志、古田 伸夫、河野 光慧、
壁谷 眞由美、認知症高齢者の家族介護
者の役割間葛藤と注意機能—役割間葛藤
のプロセスにおける注意機能の調整媒
介効果—、日本認知・行動療法学会第 42
回大会、2016

Morimoto, H., Furuta, N., Kono, M., &
Kabeya, M., Buffering effect of social
support on the impact of interrole
conflict between work and caregiving
roles on the mental health of family
caregivers of people with dementia in
Japan, 31st International Congress of
Psychology, 2016

森本 浩志、古田 伸夫、河野 光慧、
壁谷 眞由美、認知症患者の家族介護者
の役割間葛藤の測定、日本認知・行動療
法学会第 41 回大会、2015

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~hmori/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

森本 浩志 (MORIMOTO, Hiroshi)

明治学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：2 0 6 4 4 6 5 2

(2)研究協力者

古田 伸夫 (FURUTA, Nobuo)

河野 光慧 (KONO, Mitsue)

壁谷眞由美 (KABEYA, Mayumi)